慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『山谷詩集注』を読むために
Sub Title	A guide for Shangu Shiji Zhu (山谷詩集注, an annotated edition of Shangu's anthology of poems)
Author	村越, 貴代美(Murakoshi, Kiyomi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2016
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・ 文化・ コミュニケーション (Language, culture and communication). No.48 (2016.) ,p.63- 89
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	挿表
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20161231-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『山谷詩集注』を読むために

村越　貴代美

『山谷詩集注』は，宋の黄庭堅撰，任淵注。

黄庭堅（1045 ～ 1105），字は魯直，号は山谷道人，晩年は涪翁と号した。洪州分寧（今の江西省修水県）の人。「換骨奪胎」で知られる詩論を確立し，後に江西詩派の祖とされた。著に『豫章黄先生文集』『山谷琴趣外篇』等がある。豫章は，今の江西省北部。

任淵（1090 ？～ 1164），字は子淵，四川の新津県三江の人。若い頃に黄庭堅に詩を学んだ。北宋の政和元年（1111）に『山谷詩集注』の初稿が成り，その後増補修正を加え，四十年ほど後，紹興二十五年（1155）に許尹（1095 ～ ？）の序を冠し，『山谷詩集注』二十巻[1] が『後山詩注』十二巻とあわせて四川で刊行された。後山は，陳師道（1053～1101）の号，黄庭堅に詩を学んだ一人。

黄庭堅の詩文を読むために現在利用できる注釈書や研究書に，次のようなものがある。

○荒井健注『黄庭堅』，中国詩人選集二集 7，1963 年，岩波書店。

○倉田淳之助注『黄庭堅』，漢詩大系 18，1967 年，のち漢詩選 12，1997 年，集英社。

○黄宝華選注『黄庭堅選集』，1991 年，上海古籍出版社。

○鄭永暁『黄庭堅年譜新編』，1997 年，社会科学文献出版社。

○劉琳・李勇先・王蓉貴校点『黄庭堅全集』，2001 年，四川大学出版社。

○劉向栄校点『黄庭堅詩集注』，2003 年，中華書局。

○黄宝華点校『山谷詩集注』，2003 年，上海古籍出版社。

○鄭永暁整理『黄庭堅全集輯校編年』，2008 年初版，2011 年修訂版，江西人民出版社。

黄庭堅はかつて日本でもよく読まれ，本文を抄したり注を書き込んだものが数多くあり，近年，研究の重要性がふたたび説かれるようになった[2]。

1）銭鍾書が任淵注を補正した四十条が，『談芸録』（中華書局，1984 年，5～17 頁）にある。

2）加藤国安「黄庭堅釈析―年譜・世系と十七歳までの足跡」（『名古屋大学中国語学文学論集』21，2009 年，37～65 頁），「黄庭堅詩釈析（二）―叔祖・叔父の隠士詠」（『名古屋大学中国語学文学

一，任淵注の面白さ

任淵の『山谷詩集注』は注釈の最も早いものの一つであり，黄庭堅が崇寧四年（1105）に没して数年後の政和元年（1111）に初稿が成ったが，当時は新旧の党派による政治闘争が苛烈で，旧法党（黄庭堅もその一人と見なされた）の書籍は出版禁止になっていた。崇寧二年（1103）に出された禁書の令は靖康元年（1126）に解かれ，黄庭堅の甥の洪炎が編纂した『豫章黄先生文集』が建炎二年（1128）に刊行されるが，時代は黄庭堅の生きた北宋が金の侵攻によって滅び，南宋に移ろうとしていた。靖康は北宋最後の皇帝欽宗の年号で，元年しかない。建炎は，いわゆる「靖康の変」のときに都にいなかった欽宗の弟の康王構（後の高宗）が江南に逃れて即位し，臨安（いまの杭州）に都を定めて建てた南宋最初の年号である。金は都を手中にした後，徽宗・欽宗以下皇族や官僚，民間人も含めて数千人を北方へ連行した。難を逃れた人々は，江南へ避難した。これを「南渡」という。

黄庭堅は哲宗の紹聖元年（1094），編纂に加わった『神宗実録』で新法を非難したとされ，四川へ左遷される。そこで当地の若い人々に慕われ，のちに注釈書が四川で刊行されるに至る。台北中央図書館蔵朝鮮覆宋本『山谷詩集注』巻首にある「黄陳詩集注序」に，「始山谷来吾郷，徜徉於岩谷之間，余得以執経焉（山谷が我が郷里に来て，岩や谷のあいだを逍遥するようになり，私も学問を授かることになった）」とあり，『宋史』本伝に黄庭堅が戎州に左遷されてから「蜀士慕従之游，講学不倦。凡経指授，下筆皆可観（蜀の人々が慕ってつき従うので，熱心に教えた。およそ教えを受けた者は，みな文章に見るべきものがある）」とあり，洪炎「豫章黄先生退聴堂録序」にも「遷黔州・戎州，蜀士流相勧就学，以詩教諸生焉（黔州・戎州に左遷されると，蜀の文人たちが争って教えを請い，詩を彼らに教えた）」とある[3]。中央から排斥されたが故に生まれた縁である。

筆者は博士論文で，北宋末に新法党の立場で人生を浮沈した詞人，周邦彦を当時の音楽（とくに雅楽）との関わりにおいて論じた[4]。黄庭堅はちょうど同じ時期に，旧法党の立場で官界を過ごした詩人である。任淵が注をつけた詩は，地方官をしていた黄庭堅が旧法党の時代になって中央に戻され，中央で官途につき始めた周邦彦が地方へ出される頃から，

論集』24，2012 年，109～147 頁），大島絵莉香「市立米沢図書館蔵『山谷詩集注』抄本翻刻・注釈―「詠史呈徐仲車」」（『名古屋大学中国語学文学論集』25，2013 年，27～68 頁），など。

3）呉暁蔓「任淵生平及任注黄，陳詩考」，『九江学院学報』2009 年第 5 期，19～21 頁，参照。

4）『北宋末の詞と雅楽』，慶應義塾大学出版会，2004 年。

新法党が勢力をのばして黄庭堅が僻地に左遷されてそのまま病没し，中央では雅楽の整備が始まって音律に詳しかった周邦彦が都へ戻され活躍しようかという頃までの，作品である。

周邦彦の著作はちょうど黄庭堅とは逆に，南宋になってから北宋滅亡の原因が新法政策にあった（大規模な雅楽整備も含む）との批判から，詞に比べて詩文の編纂が遅れた[5)]。明州で周邦彦の子孫が家集として伝えていたものを，周邦彦と個人的に関係のあった楼鑰が発見し，周邦彦の曾孫の周鑄と協力して刊刻したが，現在ではほとんど伝わっていない。詞には南宋の陳元龍による詳細な注が付けられた。ちょうど二人はコインの裏表のような関係であり，筆者個人はその点がまず興味深い。

また南宋の詞人で，周邦彦と同じく音律に詳しかった姜夔が若い頃に黄庭堅の詩を学んだと書き残している[6)] ことから，何をどう学び継承したのか，そこにも関心がある。

黄庭堅の詩は「字字有出処（どの言葉にも由来がある）」と称され，任淵の注は用語の出典を調べて「換骨奪胎」の様子を明らかにしようとしたものと評価されている。注は詳細かつ膨大で，試みに巻一の注に引用されている文献と詩人を調べたところ，文献（主に書物）は百種を超え，詩人は六十名ほどになった[7)]。経書のほか，思想書や歴史書，農業など科学書，筆記小説・詩文・百科全書などが利用されている。仏典も多く，詩人では陶淵明・韓愈・杜甫・蘇軾がとくに多い。中には後に失われて伝わらない書物もあり[8)]，資料的価値も高い。

たとえば，黄庭堅には茶を詠んだ詩が多いが，任淵は注に唐・陸羽『茶経』を引用する。『茶経』には茶の製造法などの他に，茶にまつわる故事をあれこれ記している部分があり，こんな話が載っている。

宋録，新安王子鸞・豫章王子尚詣曇済道人於八公山，道人設茶茗，子尚味之曰，此甘

5）羅忼烈「擁護新法的北宋詞人周邦彦」，『詞曲論稿』，中華書局香港分局，1977 年，32～110 頁，参照。周邦彦の作品の編纂については，拙論「南宋における周邦彦の作品の編纂」，『図書館情報大学研究報告』14（2），1996 年，71～94 頁，参照。

6）拙論「漢陽時代の姜白石」（『学芸国語国文学』48 号，東京学芸大学国語国文学会，2016 年，134～143 頁），参照。

7）別稿「黄庭堅に詩を学ぶ――姜夔」（『風絮』十三号，日本詞曲学会，2017 年，掲載予定）で，詳細を挙げた。二十巻全体では，四百種を超える書物が引用されているという。莫礪鋒『江西詩派研究』，斉魯書社，1986 年，54 頁，参照。

8）呉暁蔓「任淵『黄陳詩集注』所引宋人佚書考」，『古籍整理研究学刊』2012 年第 2 期，43～53 頁，参照。

露也，何言茶茗焉。

『宋録』に，「新安王の子鸞，豫章王の子尚のふたりが，曇済道人を八公山に訪ねた。道人は茶でもてなした。子尚はこれを味わい『これはまさに甘露だ。どうして茶と呼べようか』と言った」とある。

この『宋録』が散逸して，現代の『茶経』の注釈書では「不詳」とされる。布目潮風・中村喬編訳『中国の茶書』では「『太平御覧』巻八六七，茗の条もこの文を引いて『宋録』となっている。南朝梁の裴子野の撰した『宋略』二十巻が『隋書』経籍志に見え，今は伝存しないが，その誤りではなかろうか」という[9]が，黄庭堅の「謝送碾壑源揀牙」詩の「甘露薦椀天開顔」句の任淵注に「陸羽顧渚山記載王智深宋録曰」として，同じ文を載せる。王智深は，南朝宋の人。

顧渚山というのは，湖州市の北，江蘇省宜興市との境にある山で，唐代の貢茶の産地。この一帯で採れるお茶を「陽羨茶」といい，中でも最高級のものを「顧渚紫筍茶」といって，若芽だけで作るお茶。陸羽は，最後はこの地で亡くなった。『茶経』以外にも著作があったが，『顧渚山記』もふくめて他は散逸した。

したがって『顧渚山記』は任淵注から輯佚できるが，『太平御覧』では王智深『宋紀(記)』がいくつか引かれている。『太平御覧』以外の書にも，『宋紀』や『宋記』として引用されていて，「宋録」は「宋紀（記)」の誤りではないか（「宋略」ではなく)，と考えたほうが妥当であろう。任淵が引用する際に誤ったのか，任淵が見た陸羽『顧渚山記』にそう書いてあったのかは確かめられないが，『茶経』にも「宋録」とあるので，陸羽が見たのは「宋録」だった可能性が高い。

王智深の書が「宋紀」「宋記」「宋録」のいずれだったにせよ散逸してしまったが，『太平御覧』は裴子野『宋略』もいくつか引用している。つまり「裴子野宋略」「王智深宋紀(記)」「宋録」の三つが引用されているのだが，「宋録」はこの茶のエピソードひとつしかなく，陸羽『茶経』からの孫引きであろう。

任淵は黄庭堅の「以梅餽晁深道戯贈二首」其一の「依依茶塢竹籬間」句の注にも「陸羽顧渚山記曰…」と引いていて，いまは散逸して見られない『顧渚山記』を利用できたようである。

任淵の生きた宋代は，中国で木版印刷が普及した時代で，詩人が自分の作品を編纂することが増え，同時代の詩人の注釈を作ることも増えた。個人で蔵書を持つことも増え，民

9）布目潮風・中村喬編訳『中国の茶書』，平凡社，2007 年ワイド版，122 頁。

間での教育が普及して書院も発達した。黄庭堅も，高祖（四代前の先祖，曾祖父の親）の黄元吉が書物を好んで集め，元吉の子の中理がその蔵書をもとに桜桃洞書院と芝台書院という学堂を建て，万巻を蔵したという[10)]。

書物を博覧して，詩を作る。その詩を弟子が読み，典故用例を引きながら注釈をつける。それをまた学ぶ詩人たちがいる。漢代以来の伝統的な注疏の学が，民間で，個人のレベルで，展開されている。これもまた任淵注の面白さである。

二，テキストについて

任淵の『山谷詩集注』二十巻は，のちに「内集」と呼ばれる洪炎編『豫章黄先生文集』の中から詩を選んで注したものであるが，任淵が底本としたテキストにももともと注があって，それは「元注」として引用される。

『豫章黄先生文集』の現存する古いものは，三種ある[11)]。

①『豫章黄先生文集』三十巻『外集』十七巻（存文集巻五至巻九，巻十六，巻十七，巻二十，巻二十一，巻二十四至巻二十六，外集巻五至巻九，巻十四，巻十五），内閣文庫蔵。

②『豫章黄先生文集』三十巻，『四部叢刊』所収。乾道年間の刊本に宋以後の補版があると考えられている。

③『豫章黄先生文集』三十巻『外集』十四巻（存文集巻二至巻十四，巻十七至巻十九，外集巻一至巻六），天理大学附属図書館蔵。（②と同一系統）

いずれも詩型による分類だが，押韻の関係で，古詩とみるか近体詩（律詩絶句）とみるか見解が異なっているようである。内閣文庫本は巻七巻八に律詩，巻九に絶句を収めるが，これを四部叢刊本は古詩としているケースが目立つ。黄庭堅の詩は，押韻がゆるい[12)]のである。洪炎が編纂したものを，李彤が後から改編重訂[13)]したのが四部叢刊本だとする説もある。

10）加藤国安「黄庭堅釈析―年譜・世系と十七歳までの足跡」，44 頁。

11）倉田淳之助『黄庭堅（漢詩選 2)』解説，集英社，1997 年，初版は 1967 年。

12）倉田淳之助氏はこれを「声律を厳守しないのは宋詩の特徴である。それは一方に実際音に本づいた詞（詩餘）が寛大な韻律に拠っていたこともあり，従来の声律に対する観念が変化したといえるのであろう」と評する。『黄庭堅（漢詩選 2)』解説，20 頁，参照。

13）たとえば，洪炎が全作品の冒頭に置いたはずの「古詩（古風）二首上蘇子瞻」が，四部叢刊本では巻二の最後に置かれている。

中には，内閣文庫本で一つの詩題にまとめてあるものが，四部叢刊本で分かれているケースがある。両者をつきあわせてみた結果，四例見つかった。いずれも内閣文庫本では巻九「絶句」に分類されているもので，

①内閣本巻九 6 首め「戯詠猩猩毛筆二首」を，四部叢刊本は巻九 52 首め「戯詠猩猩毛筆」と 53 首め「客有和予前篇為猩猩解嘲者復戯作詠」に分ける。（任淵注本は巻三 19 首め）

②内閣本巻九 20 首め「題劉将軍鴈二首」を，四部叢刊本は巻五 23 首め「題劉将軍鴈」と巻九 60 首め「題劉将軍鴈」に分ける。（任淵注本は巻七 15 首め）

③内閣本巻九 40 首め「題子瞻寺壁小山枯木二首」を，四部叢刊本は巻五 17 首め「題子瞻寺壁小山枯木」と巻九 57 首めに「子瞻寺壁小山枯木」に分ける。（任淵注本では巻九 22 首め）

④内閣本巻九 50 首め「寺斎睡起二首」を，四部叢刊本は巻五 11 首め「寺斎睡起」と巻九 44 首め「寺斎睡起」に分ける。（任淵注本は巻十一 2 首め）

また，内閣文庫本の欠巻部分でも，任淵注本では同じ詩題にまとめられているのに四部叢刊本では分かれているケースが二例あった。

⑤「万州下巌　并序」二首を，四部叢刊本は巻五 31 首めを「万州下巌」とし，巻十 4 首めを「万州之下巌唐末有劉道者定州無極人聞道於雲居膺禅師為開巌第一祖法号道微自鑿石龕曰死便蔵龕中不用日時門人奉其命二百年来遊者題詩不可勝読莫能起此開巌者故予作二篇表見之其一用楊子安韻其一用王定国韻」を詩題として，収める。（任淵注本では巻十四 6 首め）

⑥「劉邦直送水仙花四首」を，四部叢刊本は巻七 9 首めに「劉邦直送水仙花」として一首，巻十 34 首めに「劉邦直送早梅水仙花三首」として三首に分けて，収める。（任淵注本では巻十五 19 首め）

この計六例はいずれも，四部叢刊本で分けていたものを任淵注本では統合しており，また四部叢刊本の巻五の「寺斎睡起」の詩題下に「元酺池寺睡起二首共一東字韻」の注があって，二首が連作であるという意味だろう。ここから考えると，四部叢刊本の系統のほうが早い成立で「古詩」と「律詩」に分かれていたものを，内閣文庫本の系統では押韻によって整理して「絶句（附五言詩）」にあわせ，任淵注本は内閣文庫本の系統のテキストに従っている，ということになろう。

内閣文庫本のほうが字も大きく美しいので，版本としては四部叢刊本より早そうだが，四部叢刊本がもとにしているテキストは，内閣文庫本より古い姿を残しているのではない

かと思われる。

任淵は，内閣文庫本の系統のテキストに基づいている可能性のほうが高いと考える理由の一つは，いま見た六例を任淵注本では一つの詩題としてまとめていることだが，⑤の四部叢刊本の巻十4首め「万州之下巌唐末有劉道者定州無極人聞道於雲居膺禅師為開巌第一祖法号道微自鑿石龕曰死便蔵龕中不用日時門人奉其命二百年来遊者題詩不可勝読莫能起此開巌者故予作二篇表見之其一用楊子安韻其一用王定国韻」は，詩題と序をあわせてしまっているのである。こうした例が四部叢刊本にはほかにもいくつかあり，任淵注本とは異なる。これも任淵注本が四部叢刊本の系統に拠っていないと考えられる理由の一つである。

任淵注本には，『修水集』から採ったとする詩も三首ある。「又借答送蟹韻并戯小何」「代二螯解嘲」「又借前韻見意」の三首で，巻十七に収められる。逆に，四部叢刊本にあるのに任淵注本にない詩が一首ある。「題東寺柱」で，『豫章黄先生文集』巻十一にある。

以上，四部叢刊本の系統のテキストが整理されて内閣文庫本の系統のテキストへ，さらに任淵注本へという流れが見えてきた。（附録：三種のテキストの対照表，参照）

任淵『山谷詩集注』二十巻は，もとは『後山詩注』六巻とあわせて刊行された。はじめ四川で刊行され，のちに閩中で再刻された。紹定五年（1132）の閩中刻本が日本に伝わり，日本の南北朝時代に覆刻されたものが，市立米沢図書館に所蔵される。「日本に於ける山谷詩集注は皆これから出，又楊守敬が中国に伝えて，光緒中に陳三立が景刊し，それをさらに影印したものなどがある」[14] とされるもので，デジタルライブラリーで画像データが公開されている（以下，米沢本）。これをもとにした抄本もあり，行間や欄外にびっしり書き込みがある[15]。

中国では明代に黄庭堅の著作をすべて網羅しようとして全集の類が編纂されたが，米沢本が伝えられて以後は，詩集の「内集」部分には陳三立本が使われることが多い。

任淵は『外集』も引用しているので，紹興二十五年（1155）に四川で『山谷詩集注』二十巻が刊行されるまでに，洪炎編『豫章黄先生文集』と李彤編『外集』（李彤は洪炎が編纂した部分にも手を加えた。「外集」が出たので洪炎が編纂したものは「内集」や「正集」とも呼ばれる）も刊行されていた，と考えられる。

14）倉田淳之助『黄庭堅（漢詩選2）』解説，23頁。

15）ハーバード・燕京・同志社東方文化講座委員会，市立米沢図書館『米沢善本の研究と解題』，1958年，158頁，参照。ほかに注釈だけを記した本もあり，黄庭堅がどれほど読まれていたか分かる。同書所収の倉田淳之助「東坡抄と山谷抄」も，参照のこと。

三，任淵はどのように注をつけたか

任淵は詩型により分類された『豫章黄先生文集』を底本にしつつ，編年によるテキスト（「張方回家本」「張淵方回家本」として任淵注に引用される）を参考にして，制作順に並べた。

任淵は詩題にも注をつけ，おもにその詩が作られた背景が論じられるが，目次の下にはさらに詳しく繫年の根拠が記される。のちに黄庭堅の孫の黄罃（1150 ～ 1212）が『山谷年譜』を作った[16] 際にも，「蜀本旧注」「蜀本任氏旧注」としてしばしば引用されている[17]。

任淵の『山谷詩集注』二十巻全体を見てみると，必ずしも十分に編集し終えないうちに刊行されたように思える。詩句に付けられた注は順序が前後していることがままあり，明代に全集として他の注釈書なども含めてまとめられた際には，順序を整えようとした形跡がある。

任淵は李彤が編纂した『外集』も参考にしているが，目次に付された「年譜」ではしばしば言及されるのに，詩句の注には巻十に収める「次韻答曹子方雑言」に二箇所，「往時尽酔冷卿酒，侍児琵琶春風手」の注に「豫章外集又有和子方雑言，亦及此事」と「喚取張侯来平章，烹茶煮餅坐僧房」の注に「按外集有送曹子方兼簡張仲謀詩」が出てくるだけで，初稿を書いたあと改訂していた途中で『外集』を入手し，利用したものかと思われる。

任淵の注については，四部叢刊本とくらべて「文字を異にするところがかなりあるが，殆んど注者の臆改であると思われる」と，倉田淳之助氏は批判する[18]。倉田氏が例に出した二首のうち「書磨崖碑後」が内閣文庫本にも入っていたので見ると，「臣結春秋二三策」が任淵注本では「春秋」が「春陵」になっているとあるが，内閣文庫本も「春陵」に作る。この詩句に対する任淵の注に，

春陵或作春秋，非是。〇元結春陵行序曰，漫叟授道州刺史。道州旧四万余戸，経賊已

16）慶元五年（1199），黄罃の『山谷年譜』が成る。

17）黄罃は任淵が見られなかった資料（とくに真筆や石刻）も利用して，任淵の説を改めた箇所も多い。浅見洋二「黄庭堅詩注の形成と黄罃『山谷年譜』――真蹟・石刻の活用を中心に」（『集刊東洋学』百号 特別記念号，東北大学中国文史哲研究会，2008 年），「校勘から生成論へ――宋代の詩文集注釈，特に蘇黄詩注における真蹟・石刻の活用をめぐって――」『東洋史研究』68 巻 1 号，2009 年，34～69 頁，参照。

18）倉田淳之助『黄庭堅（漢詩選 2）』解説，22～23 頁。倉田氏は訳注をつけるにあたって，おおむね四部叢刊本に従った，という。

来，不満四千。到官未五十日，承諸使徴求符牒二百余封。吾将守官，静以安人，待罪而已。此州是春陵故地，故作春陵行，以達下情。孟子曰，吾於武成取二三策。此借用。

「春陵」を「春秋」に作るテキストがあるが，正しくない。〇元結の「春陵行」序に「漫叟道州刺史を授けらる。道州は旧四万余戸，賊を経てより已来，四千に満たず。官に到りて未だ五十日ならざるに，諸使の徴め求むる符牒二百余封を承く。吾 将に官を守り，静め以て人を安んじ，罪を待つのみ。此の州は是れ春陵の故地なり，故に春陵行を作り，以て下情を達す」とある。『孟子』に「吾 武成に於て二三策を取る」とあり，ここは借用した。

とある。元のテキストが「春陵」であったので，解釈すべく文献に当たって唐・元結の「春陵行」を出し，「春秋」とするテキストもあるが「春陵」のほうがよいと考えたのである。注の途中に「〇」があるが，こうした例は散見され，あとから注を書き足していった様子がうかがえる。

「春陵行」は元結の代表作なので，任淵は「臣結」の語注として引用した。それは妥当ではなく，「春秋は中興頌中に寓した春秋褒貶の義であると『授堂金石跋』に指摘している」と倉田氏は否定するが，「春陵」と「春秋」のどちらがよいか，そこは解釈の問題であり，「臆改」はやや厳しいかも知れない。倉田氏も任淵注にある『孟子』の典故は，採用しているのである[19]。

任淵の注はとにかく膨大であり，じっくり読んで検討する価値があるだろう。

四，実際に読んでみる

『山谷詩集注』巻一の中から，「次韻公択舅」を実際に読んでみよう。原文は，次のようになっている（適宜，句読をつける）。

次韻公択舅

昨夢黄粱半熟，立談白璧一双。驚鹿要須野草，鳴鴎本願秋江。

四部叢刊本と米沢本で，文字の異同はない。これに対して，任淵が注をつけた。

黄粱見上注。史記虞卿伝曰，説趙孝成王，一見賜黄金百鎰，白璧一双。唐人王建六言詩曰，再見封侯万戸，立談賜璧一双。嵇康絶交書曰，禽鹿志在豊草。

書名や篇名には省略があり，人名は名と字が混在し通称もある。また巻数はない。任淵

19）倉田淳之助『黄庭堅（漢詩選 2）』，318 頁。

や同じレベルの素養のある人にとっては，これで十分な情報だったのであろう。

いま見やすいように，番号を詩句（1～）や注（①～）にふって，注に対する補注（○）や注で触れられていない事柄に対する補注（◎）をほどこし，少し詳しく検討する。任淵注の地の文には現代語訳を，任淵が引用している文献については，原則として韻文には訓読を，散文には訓読または現代語訳を付す。

【黄庭堅詩】

次韻公択舅　　公択舅に次韻す

1 昨夢黄粱半熟　　昨夢　黄粱　半ば熟す
2 立談白璧一双　　立談　白璧　一双
3 驚鹿要須野草　　驚鹿は要するに野草を須(もと)め
4 鳴鴟本願秋江　　鳴鴟は本(もと)より秋江を願う

【任淵注】

①黄粱見上注。②史記虞卿伝曰，説趙孝成王，一見賜黄金百鎰，白璧一双。③唐人王建六言詩曰，再見封侯万戸，立談賜璧一双。④嵇康絶交書曰，禽鹿志在豊草。

①黄粱　上注（「王稚川既得官都下有所盼未帰予戯作林夫人欵乃歌二章与之（竹枝歌本出三巴其流在湖湘耳）欵乃湖南歌也」其二「蓋世功名黍一炊（世を蓋(おお)って功を成すも黍一炊）」の注），参照。○「邯鄲の夢」の故事。「王稚川…」の注には，「異聞集，道者呂翁，経邯鄲道上邸舎中。有少年盧生，自歎其貧困。言訖思寐。時主人方炊黄粱為饌，翁乃探懐中枕，以授生。枕両端有竅。生夢中自竅入其家，見其身富貴五十年，老病而卒。欠伸而悟，顧呂翁在傍，主人炊黄粱尚未熟。山谷所引蟻穴夢，自是一事，亦見異聞集，当是記憶不審耳。詩意則謂功名正復蓋世，豈若菽水奉親之楽耶（『異聞集』に「道士の呂翁が邯鄲に向かう道中で宿に泊まった。そこに盧生という若者がいて，身の困窮を嘆いた。身の上話を話し終えると眠くなった。このとき宿の主人は黍ご飯を炊いていた。呂翁は懐中から枕をとりだし，盧生に与えた。枕の両端には穴があり，夢の中で穴をのぞくと，そこの家では五十年の富貴を尽くし，老いて病になり死ぬのが見えた。のびをして目を覚ますと呂翁が傍らに居り，主人が炊いていた黍はまだ炊き上がっていなかった」とある。山谷が引いた「蟻穴夢」はこれと同じで，この説話は『異聞集』にも見えるが，記憶が不確かだったの

であろう。詩の意味は，功成り名遂げて天下を圧しようとも，貧しくも仲睦まじい暮らしの喜びには及ばない，ということである）」とある。『異聞集』は，唐末・陳翰が編纂した伝奇小説集。後に散佚した。『太平広記』巻八十二「呂翁」にこの話を載せ，文末に「出『異聞集』」とある。

②立談白璧一双　『史記』巻七十六「平原君虞卿列伝」に，「趙の孝成王に説くに，一見して，黄金百鎰，白璧一双を賜う」とある。○虞卿は遊説の士。草履を履き，笠を背にして，趙の孝成王に遊説した。最初の謁見で黄金百鎰，白璧一組を下賜され，二度目の謁見で趙の上卿に召された。白璧は，中央に円形の孔のある平らな丸い玉。

③白璧一双　唐の王建の六言詩「田園楽七首」其二に，「再見して侯万戸に封ぜられ，立談して璧一双を賜る」とある。○任淵は王建とするが，王維の詩。なぜ王建に誤ったかは，不明。類書を検索してみたが，似た詩句で王建の作とするものは見つからなかった。

④驚鹿要須野草　嵇康の「与山巨源絶交書」に，「禽鹿，志は豊草に在り」とある。○嵇康「与山巨源絶交書」は，『文選』巻四十三に載せる。任淵注は節録。自分は『荘子』や『老子』を読んで放縦になり，世間での栄達を願う心は失せた，これは「鹿が小さい時に飼育されれば調教に従うが，成長してから束縛されると死に物狂いで綱を引きちぎって熱湯や火の中にさえ飛び込むようなもので，黄金のくつわで飾られても，おいしい御馳走でもてなされても，ますます深い林を懐かしみ，茂った草を求めるようなものです」という一節。

◎李常（1027 ～ 1090），字は公択，建昌（いまの江西省永修西北）の人。仁宗の皇祐元年（1049）の進士。神宗の熙寧年間，新法に反対して地方に出され，知鄂州，湖州，斉州を歴任した後，淮南西路提点刑獄に遷る。元豊六年（1083）に太常少卿に召され，礼部侍郎となり，哲宗が即位してからは戸部尚書となる。元祐五年（1090），成都に遷る途中で卒した，六十四歳。『宋史』巻三四四に伝がある。現存する詩は，五首のみ。黄庭堅が次韻したもとの詩は，残っていない。李常は，黄庭堅の母方のおじ（「舅」は母の兄弟）で，蘇軾の友人，王安石とも親しかった。黄庭堅が十四歳の時，父の黄庶が康州で亡くなった，享年四十一歳。李常が康州まで行って，棺を郷里に運んで葬った。一家は十数人，生活に困窮したが，母は子供たちの教育をあきらめず，黄庭堅は十五歳の時に郷里を離れて，李常のもとで四年間を過ごし，学問に励んだ[20]。「次韻公択舅」は，「李常が御史中丞になったが，新法に反対して地方官になったのを慰めたのである」[21] という。

20）加藤国安「黄庭堅釈析―年譜・世系と十七歳までの足跡」，参照。

21）倉田淳之助注『黄庭堅（漢詩選 2)』，38 頁。

【通釈】

舅の李常（字は公択）の詩に次韻する

昨夜の夢は，黄粱が十分に煮えぬほどの短い間のことでした。

かつて虞卿が立ち話で白璧一双をいただいた夢を，見ていました。

驚いて走る鹿が求めるのは野草でしょうし，

鳴く鴎が願うのは秋の川辺でしょう。

訳注をつけるとしたら以上で十分かも知れないが，詩の制作の背景についてもう少し調べてみる。任淵はこの詩を，神宗元豊三年（1080）冬の作とする。

任淵の目次附「年譜」に，

元豊三年庚申　是歳春山谷在京師。蓋罷北京教官後，赴吏部，改官，得知吉州太和県（旧有寄李公択詩序云，元豊庚申歳，庭堅得邑太和）。其秋，自汴京帰江南（外集有暁放汴州詩云，秋声満山河。末云，又持三十口，去作江南夢）。

元豊三年庚申　この年の春，山谷は都にいた。おそらく北京の教官を辞めたのち，吏部に遷り，官を改め，知吉州太和県になったのであろう（旧本に「寄李公択詩序」があり，「元豊庚申歳，庭堅得邑太和」とある）。秋，汴京から江南に帰った（『外集』巻八に「暁放汴州（舟？）」詩があり，「秋声満山河」とあり，末に「又持三十口，去作江南夢」とある）。

とある。この年の作として，目次（附年譜）には，

次韻王稚川客舎二首

彭山黄氏有山谷手写此詩，題云王欲稚川元豊初調官京師云云，当是山谷北京解官後，至京師所作。後篇欵乃歌有長安城中花片飛，蓋春晩時也。

彭山の黄氏のところに黄山谷の自筆のこの詩があり，詩題に「王欲稚川は元豊年間（1078 ～ 1085）初に都（汴京）へ転勤となり…」とあるので，この詩は山谷が北京での教授職を辞めて，都へきた時のものであろう。後篇の「欵乃歌」に「長安城中花片飛」とあるので，晩春の頃である。

欵王稚川既得官都下有盼未帰予戯作林夫人欵乃歌二章与之欵乃湖南歌也

次前篇。

前篇の次に置く。

詠史呈徐仲車

張方回家本，置此篇於太和詩中。按仲車家于楚州，当是山谷赴太和時，舟行経途所

作。

張方回家本では，この篇を太和県で作った詩の中に置く。仲車は楚州に家があるので，山谷が太和県に赴任するに当たって，舟行で途中訪れて作ったのであろう。

宿旧彭沢懐陶令

彭沢在江州，亦経途所作。以張方回家本編次。按山谷過南康軍，祭劉凝之文云，元豊三年庚申十二月辛酉。其宿彭沢，蓋亦同時。到官或在明年之春夏歟。

彭沢は江州にあり，これも赴任先へ行く途中の作である。張方回家本の編次による。山谷が南康軍を通ったのは「祭劉凝之文」に「元豊三年庚申十二月辛酉」と記している（「祭劉凝之文」は『山谷集』巻二十一にあるが「元豊三年庚申十二月辛酉」云々は不詳）。彭沢で宿をとって，同じ時に作ったのであろう。着任したのは，翌年の春か夏であろうか。

題山谷石牛洞

旧本有寄李公択詩序云，庭堅得邑太和，舅氏李公択提点淮南西道刑獄，自同安来，相見於皖口。風雨中，留十日。此詩蓋是時所作。同安皖城，皆隷舒州。石牛洞在舒之三祖山山谷寺。魯直嘗游而楽之，因自号山谷道人。

旧本には「李公択に寄せる詩序」があり，「わたし庭堅は太和県へ行くことになり，舅の李氏公択，提点淮南西道刑獄が，同安から来て，互いに皖口で会った。風雨の中，十日ほど泊まった」とある。この詩は，この時の作であろう。同安と皖城は，どちらも舒州にある。石牛洞は舒州の三祖山山谷寺にある。魯直はかつてここに遊んで楽しかったので，山谷道人と自ら号した。

題灊峰閣

次前篇。灊山亦在舒州。詩有梅蘂之語，蓋冬末所作。

前篇の次に置く。灊山も舒州にある。詩に「梅蘂」の語があるので，冬の終わりの作であろう。

次韻公択舅

次前篇。李常，字公択。

前篇の次に置く。李常，字は公択。

の各詩が並ぶ。「彭山黄氏」（彭山は四川省）が黄庭堅の手写した詩（本としてまとまっていたのかどうか，ここだけでは不明）を持っていて，任淵は見せてもらったことと，「張方回家本」が編年のテキストで，それを参考にしつつ詩の内容を踏まえて任淵も繫年したことが，ここの注から分かる。「旧本」は『豫章黄先生文集』を指すと思われるが，四部

叢刊本と内閣文庫本を見ても，任淵の注しているように文字がある場合もあるが，ない場合もある。任淵は「蜀中旧本」とすることもあり，また「予家所蔵旧本」とすることもあって，『山谷詩集注』刊行までに『豫章黄先生文集』の複数のテキストがあったと思われる。

おわりに

黄庭堅の作品は，詩だけではないし，その詩も任淵が注した「内集」だけではない。黄庭堅は書にもすぐれていたため，真蹟や石刻は文学研究の資料としてのみならず，書そのものも鑑賞や研究の対象になる。

『山谷詩集注』巻五に「戯詠蠟梅二首」があり，その詩題注に云う，

> 山谷書此詩後云，京洛間有一種花，香気似梅花，亦五出而不能晶明，類女功撚蠟所成。京洛人因謂蠟梅。木身与葉乃類蒴藋。賓高州家有灌叢，能香一園也。王立之詩話云，蠟梅，山谷初見之，戯作二絶，縁此盛於京師。
>
> 山谷はこの詩の後に次のように書いた。「都に一種の花があり，香りは梅に似ていて，花は五弁，にぶく暗い色で，女工が蝋をこねて作ったようである。そのため都の人々は臘梅と呼んでいる。木のようすと葉は蒴藋（そくず）に似ている。賓高州の家に茂みがあり，園いっぱいに香っている」と。王立之の『王直方詩話』に，「臘梅は，山谷が初めてこれを見て戯れに絶句二首を作り，そこで都に広まった」とある。

「戯詠蠟梅二首」は，いま『豫章黄先生文集』（四部叢刊本巻五，内閣文庫本巻九）を見ても黄庭堅が手書したという文はない。鄭永暁『黄庭堅全集輯校編年』[22] はこの詩について，徐邦達『古書画過眼要録（晋・隋・唐・五代・宋書法）』[23] によれば黄庭堅の書は「蠟梅詩」（『黄庭堅詩集注』巻九「出礼部試院王才元恵梅花三種皆妙絶戯答三首」詩）の識語であり，「…能香一園」に続けて「前二篇戯詠此花，後一篇於故人張仲謀□此花（前二篇は戯れに此の花を詠み，後一篇は故人張仲謀に此の花を□す）」とある，という。

徐邦達の『古書画過眼要録』を読んでみると，この手書の部分は，表装されて（絹本，縦 26.6cm × 横 210cm），後の収蔵者（清の乾隆内府印もある）の題跋がいくつも付いている。「蠟梅詩」が草書で大きく書かれ，小さめの行書で「京洛間・・」と識語が書かれ

22）鄭永暁『黄庭堅全集　輯校編年』，江西人民出版社，2008 年，（上）438 頁，参照。

23）徐邦達『古書画過眼要録（晋・隋・唐・五代・宋書法）』，湖南美術出版社，1987 年，289～291 頁。

ている，という（『古書画過眼要録』に翻字してある）。

任淵は，蠟梅の詩をいくつか読みながら，作業のどこかで黄庭堅の手書した部分を，もとあった「蠟梅詩」ではなく「戯詠蠟梅二首」のものと勘違いしたか，あるいはオリジナルを見ていない可能性もあろう。序跋の類を集めた本を，見ていた可能性がある。

いま手元に『黄庭堅尺牘名品』[24] という本がある。そこにちょうど，黄庭堅が王直方に宛てた手紙が入っている。「致立之承奉書」と題されて，現在は台北故宮博物院に所蔵される。

王直方（1069 ～ 1109），字は立之，号は帰叟。中書舎人王棫の子，家には蔵書がたくさんあり，黄庭堅にその文を愛された。江西詩派とされる。元祐年間（1086 ～ 1094）に，蘇軾・黄庭堅及び門下の人々と雅集をおこない，有名になった。任淵は注に「王立之詩話」を引用するが，散逸していまは見られない。

黄庭堅の「致立之承奉書」に，「欲為素児録数十篇妙曲作楽，尚未就爾（素児のために数十篇のよい楽曲を書いてあげたいが，まだできておりません）」とある。素児というのは王直方の家の侍女で，『墨荘漫録』巻九に「家多侍児，而小鬟素児妍麗。王嘗以蠟梅花送晁無咎，無咎以詩五絶謝之，有言芳菲意浅婆容浅，憶得素児如此花（家には侍童がたくさんいたが，小女の素児が美しかった。王直方はかつて蠟梅の花を晁無咎に送り，晁無咎がお礼に五言絶句を作ったが，その中に『芳菲は意浅く婆は容浅し，素児を得れば此の花の如くならんと憶う』とあった）」という。王直方は黄庭堅と交流があり，自身も蠟梅を人に送って詩のやりとりをするなど，していた。その上で，任淵が注に引いたような「蠟梅は山谷が詩に詠んでから広まった」と詩話に記していたわけである。

黄庭堅の「致立之承奉書」は，いつごろから書の作品として鑑賞・収蔵されていたのか不明だが，明代の汪珂玉『珊瑚網』巻五に，「又手簡一通」として載せられている。かなり早い段階から，法帖として伝わっていた可能性が高い。

このような読み方をしていくと，任淵の注から始まって，作品と作品の関係，ほかの詩人の作品との関係，詩人と詩人の交流や当時の社会生活など，いろいろな方面に広がっていくのである。

24）『黄庭堅尺牘名品』，上海書画出版社，2012 年。

【附録：三種のテキストの対照表】

任淵注本	内閣文庫本	四部叢刊本	詩題（任淵注本）
巻一 1		巻二 30	古詩二首上蘇子瞻
巻一 2	巻九 1	巻十一 38	醇道得蛤蜊復索舜泉舜泉已酌尽官醞不堪不敢送
巻一 3	巻九 2	巻九 45	次韻王稚川客舎二首
巻一 4	巻九 3	巻五 8	王稚川既得官都下有盼未帰予戯作林夫人欸乃歌二章与之欸乃湖南歌也
巻一 5		巻四 23	詠史呈徐仲車
巻一 6		巻四 24	宿旧彭沢懐陶令
巻一 7		巻十二 1	題山谷石牛洞
巻一 8		巻十二 2	題灊峰閣
巻一 9		巻十二 3	次韻公択舅
巻一 10		巻三 1	贛上食蓮有感
巻一 11	巻九 4	巻九 27	秋思寄子由
巻一 12		巻二 1	贈別李次翁
巻一 13		巻四 14	演雅
巻一 14		巻四 30	戯和答禽語
巻一 15		巻三 2	贈鄭交
巻一 16		巻三 6	平陰張澄居士隠処三詩
巻一 17		巻二 28	留王郎世弼
巻一 18		巻二 29	送王郎
巻一 19		巻二 11	次韻劉景文登鄴王台見思五首
巻一 20		巻四 26	次韻呉宣義三径懐友
巻一 21		巻四 27	送劉季展従軍雁門二首
巻一 22		巻四 28	題宛陵張待挙曲肱亭
巻二 1		巻三 3	寄裴仲謀
巻二 2	巻七 1	巻九 10	寄黄幾復
巻二 3		巻十二 20	神宗皇帝挽詞三首
巻二 4		巻十二 24	王文恭公挽詞二首
巻二 5		巻三 21	謝送碾壑源揀牙
巻二 6		巻三 22	以小団龍及半挺贈無咎并詩用前韻為戯
巻二 7		巻四 1	和答外舅孫莘老
巻二 8		巻四 7	次韻定国聞蘇子由臥病績溪
巻二 9		巻三 23	次韻子由績溪病起被召寄王定国
巻二 10		巻二 13	次韻李之純少監恵硯
巻二 11	巻七 2	巻九 5	送舅氏野夫之宣城二首
巻二 12		巻二 7	送范徳孺知慶州
巻二 13		巻二 8	題王黄州墨跡後
巻二 14		巻二 9	題王仲弓兄弟巽亭

任淵注本	内閣文庫本	四部叢刊本	詩題（任淵注本）
巻二 15		巻四 38	寄尉氏倉官王仲弓
巻三 1		巻十二 6	有恵江南帳中香者戯答六言二首
巻三 2		巻十二 7	子瞻継和復答二首
巻三 3		巻十二 8	有聞帳中香以為熬蝎者戯用前韻二首
巻三 4	巻九 5	巻九 36	謝公択舅分賜茶三首
巻三 5		巻四 22	送碧香酒用子瞻韻戯贈鄭彦能
巻三 6		巻三 4	送鄭彦能宣徳知福昌県
巻三 7		巻三 5	顕聖寺庭枸杞
巻三 8		巻二 5	次韻子瞻贈王定国
巻三 9		巻二 6	次韻張詢斎中晩春
巻三 10		巻二 2	次韻答晁無咎見贈
巻三 11		巻二 3	次韻答張文潜恵寄
巻三 12		巻二 4	同銭志仲飯籍田銭孺文官舎
巻三 13		巻二 14	次韻曾子開舎人游籍田載荷花帰
巻三 14		巻二 10	送劉士彦赴福建転運判官
巻三 15		巻十二 9	次韻韓川奉祠西太一宮四首
巻三 16		巻十二 4	次韻王荊公題西太一宮壁二首
巻三 17		巻十二 5	有懐半山老人再次韻二首
巻三 18	巻七 3	巻九 20	和答銭穆父詠猩猩毛筆
巻三 19	巻九 6	巻九 52	戯咏猩猩毛筆二首
巻三 19	巻九 6	巻九 53	戯咏猩猩毛筆二首
巻四 1		巻二 26	奉和文潜贈無咎篇末多以見及以既見君子云胡不喜為韻
巻四 2		巻三 25	次韻答邢惇夫
巻四 3		巻四 31	和邢惇夫秋懐十首
巻四 4		巻三 20	謝公定和二范秋懐五首邀予同作
巻四 5		巻三 27	送謝公定作竟陵主簿
巻四 6		巻二 24	奉答謝公定与栄子邕論狄元規孫少述詩長韻
巻四 7		巻三 28	贈送張叔和
巻四 8	巻七 4	巻九 14	送顧子敦赴河東三首
巻五 1		巻十二 21	司馬文正公挽詞四首
巻五 2		巻三 18	次韻子瞻武昌西山
巻五 3		巻二 27	子瞻詩句妙一世乃云效庭堅体蓋退之戯效孟郊樊宗師之比以文滑稽耳恐後生不解故次韻道之
巻五 4		巻二 12	柳閎展如蘇子瞻甥也其才徳甚美有意於学故以桃李不言下自成蹊八字作詩贈之
巻五 5	巻九 7	巻五 16	戯詠蠟梅二首
巻五 6	巻九 8	巻十一 43	蠟梅
巻五 7	巻九 9	巻九 39	従張仲謀乞蠟梅

任淵注本	内閣文庫本	四部叢刊本	詩題（任淵注本）
巻五 8	巻九 10	巻五 15	賈天錫恵宝薫乞詩予以兵衛森画戟燕寝凝清香十字作詩報之
巻五 9		巻三 26	次韻張仲謀過酺池寺斎
巻六 1		巻三 16	常父恵示丁卯雪十四韻謹同韻賦之
巻六 2	巻七 5	巻九 16	詠雪奉呈広平公
巻六 3	巻七 6	巻九 17	次韻宋楙宗僦居甘泉坊雪後書懐
巻六 4		巻三 19	和答子瞻和子由常父憶館中故事
巻六 5		巻三 7	双井茶送子瞻
巻六 6		巻三 8	和答子瞻
巻六 7		巻三 9	子瞻以子夏丘明見戲聊復戲答
巻六 8		巻三 10	省中烹茶懐子瞻用前韻
巻六 9		巻三 11	以双井茶送孔常父
巻六 10		巻三 12	常父答詩有煎点径須煩緑珠之句復次韻戲答
巻六 11		巻三 13	戲呈孔毅父
巻六 12		巻二 20	謝黄従善司業寄恵山泉
巻六 13	巻七 7	巻九 21	次韻奉酬劉景文河上見寄
巻六 14	巻七 8	巻九 22	見諸人唱和酴醾詩輒次韻戲詠
巻六 15		巻三 29	次韻秦觀過陳無己書院観鄙句之作
巻六 16	巻七 9	巻九 24	陳留市隠
巻六 17		巻三 15	晁張和答秦觀五言予亦次韻
巻六 18	巻九 11	巻五 10	劉晦叔洮河緑石研
巻六 19		巻三 14	以団茶洮州緑石研贈無咎文潜
巻六 20		巻三 36	謝王仲至恵洮州礪石黄玉印材
巻六 21		巻四 6	次韻文潜同游王舍人園
巻六 22		巻四 25	臥陶軒
巻六 23		巻三 32	次韻寄晁以道
巻六 24		巻三 33	次以道韻寄范子夷子黙
巻六 25		巻三 34	僧景宣相訪寄法王航禅師
巻六 26		巻三 30	次韻子瞻送顧子敦河北都運二首
巻六 27		巻三 31	慈孝寺餞子敦席上奉同孔経父八韻
巻六 28	巻七 10	巻九 19	次韻張昌言給事喜雨
巻七 1		巻三 35	送李徳素帰舒城
巻七 2		巻二 16	詠李伯時摹韓幹三馬次蘇子由韻簡伯時兼寄李徳素
巻七 3		巻二 17	次韻子瞻和子由観韓幹馬因論伯時画天馬
巻七 4		巻二 18	次韻答王育中
巻七 5	巻九 12	巻九 28	子瞻去歳春侍立邇英子由秋冬間相継入侍作詩各述所懐予亦次韻四首
巻七 6	巻九 13	巻九 29	再次韻四首
巻七 7		巻二 15	次韻子瞻題郭熙画山

任淵注本	内閣文庫本	四部叢刊本	詩題（任淵注本）
巻七 8	巻九 14	巻九 59	題郭熙山水扇
巻七 9	巻九 15	巻九 58	題恵崇画扇
巻七 10		巻十二 10	題鄭防画夾五首
巻七 11	巻九 16	巻五 24	戯題小雀捕飛虫画扇
巻七 12	巻九 17	巻五 25	題画孔雀
巻七 13	巻九 18	巻五 26	睡鴨
巻七 14	巻九 19	巻五 27	小鴨
巻七 15	巻九 20	巻五 23 古詩	題劉将軍鴈二首
巻七 15	巻九 20	巻九 60 律詩	題劉将軍鴈二首
巻七 16		巻十二 11	題劉将軍鵝
巻七 17	巻九 21	巻六 28	題晁以道雪鴈図
巻七 18		巻四 32	次韻子瞻題無咎所得与可竹二首粥字韻戯嘲無咎人字韻詠竹
巻七 19		巻四 33	次韻文潜休沐不出二首
巻七 20		巻二 19	奉同子瞻韻寄定国
巻七 21	巻七 11	巻九 9	次韻王定国揚州見寄
巻七 22		巻九 35	往歳過広陵値早春嘗作詩云春風十里珠簾卷髣髴三生杜牧之紅薬梢頭初繭栗揚州風物鬢成糸今春有自淮南来者道揚州事戯以前韻寄王定国二首
巻七 23		巻二 21	次韻銭穆父贈松扇
巻七 24		巻二 22	戯和文潜謝穆父松扇
巻七 25	巻九 22	巻九 31	謝鄭閎中恵高麗画扇二首
巻八 1		巻二 23	次韻王炳之恵玉版紙
巻八 2	巻七 12	巻九 7	謝王炳之恵石香鼎
巻八 3	巻七 13	巻九 8	次韻柳通叟寄王文通
巻八 4		巻四 29	送張天覚得登字
巻八 5	巻九 23	巻九 33	次韻徐文将至国門見寄二首
巻八 6		巻四 8	博士王揚休碾密雲龍同事十三人飲之戯作
巻八 7		巻四 9	答黄冕仲索煎双井并簡揚休
巻八 8		巻四 10	再答冕仲
巻八 9		巻四 11	戯答陳元輿
巻八 10		巻四 12	再答元輿
巻八 11		巻四 13	次韻冕仲考進士試卷
巻八 12	巻七 14	巻九 6	王聖美三子補中広文生
巻八 13	巻九 24	巻九 30	次韻游景叔聞洮河捷報寄諸将四首
巻八 14		巻四 34	和游景叔月報三捷
巻八 15	巻七 15	巻九 12	次韻崔伯易席上所賦因以贈行二首
巻八 16	巻七 16	巻九 13	同子瞻和趙伯充団練
巻八 17		巻四 15	戯答趙伯充勧莫学書及為席子沢解嘲

任淵注本	内閣文庫本	四部叢刊本	詩題（任淵注本）
巻八 18		巻四 35	謝景叔恵冬笋雍酥水梨三物
巻八 19		巻四 36	再答景叔
巻八 20	巻七 17	巻九 11	次韻幾復和答所寄
巻八 21	巻七 18	巻九 15	寄上叔父夷仲三首
巻九 1	巻九 25	巻五 1	考試局与孫元忠博士竹間對窓夜聞元忠誦書声調悲壮戯作竹枝歌三章和之
巻九 2		巻三 42	観伯時画馬礼部試院作
巻九 3	巻九 26	巻五 19	題伯時画揩痒虎
巻九 4	巻九 27	巻五 20	題伯時画観魚僧
巻九 5	巻九 28	巻五 21	題伯時画頓塵馬
巻九 6	巻九 29	巻五 22	題伯時画厳子陵釣灘
巻九 7		巻三 37	題伯時画松下淵明
巻九 8	巻九 31	巻五 7	出礼部試院王才元恵梅花三種皆妙絶戯答三首
巻九 9	巻九 32	巻五 12	王立之承奉詩報梅花已落尽次韻戯答
巻九 10	巻九 33	巻九 40	乞姚花二首
巻九 11	巻九 34	巻五 2	效王仲至少監詠姚花用其韻四首
巻九 12	巻九 35	巻九 41	寄杜家父二首
巻九 13	巻九 36	巻九 42	王才元舎人許牡丹求詩
巻九 14	巻九 37	巻九 43	謝王舎人翦状元紅
巻九 15	巻九 38	巻五 5	戯答陳季常寄黄州山中連理松枝二首
巻九 16		巻四 2	次韻子瞻送李豸
巻九 17	巻七 19	巻九 18	次韻宋楙宗三月十四日到西池都人盛観翰林公出遨
巻九 18		巻十二 23	韓献粛公挽詞三首
巻九 19		巻四 4	次韻子瞻以紅帯寄王宣義
巻九 20		巻四 5	聴宋宗儒摘阮歌
巻九 21	巻九 39	巻五 13	自門下後省帰臥酺池寺観盧鴻草堂図
巻九 22	巻九 40	巻五 17	題子瞻寺壁小山枯木二首
巻九 22	巻九 40	巻九 57	題子瞻寺壁小山枯木二首
巻九 23	巻九 41	巻五 18	題子瞻枯木
巻九 24		巻三 38	和子瞻戯書伯時画好頭赤
巻九 25		巻三 39	詠伯時画太初所獲大宛虎背天馬図
巻九 26		巻三 40	詠伯時画馮奉世所獲大宛象龍図
巻九 27		巻三 41	題竹石牧牛
巻九 28	巻九 42	巻九 56	題伯時天育驃騎図二首
巻九 29	巻九 43	巻五 6	姨母李夫人墨竹二首
巻九 30	巻九 30	巻五 9	次韻子瞻子由題憩寂図二首
巻十 1	巻五 1	巻三 17	次韻答曹子方雑言
巻十 2	巻五 2	巻四 3	次韻子瞻和王子立風雨敗書屋有感

任淵注本	内閣文庫本	四部叢刊本	詩題（任淵注本）
巻十 3	巻七 20	巻九 25	嘲小徳
巻十 4	巻九 44	巻九 51	戯答張秘監饋羊
巻十 5	巻九 45	巻五 3	戯答王定国題門両絶句
巻十 6	巻七 21	巻九 26	清人怨戯笑徐庾慢体三首
巻十 7	巻九 46	巻九 37	呈外舅孫莘老二首
巻十 8	巻九 47	巻九 38	以天壇霊寿杖送莘老
巻十 9	巻五 3	巻二 25	戯答兪清老道人寒夜三首
巻十 10	巻五 4	巻三 24	秘書省冬夜宿直寄懐李徳素
巻十 11	巻七 23	巻九 2	歳寒知松柏
巻十 12	巻七 22	巻九 1	東観読未見書
巻十 13	巻七 24	巻九 3	被褐懐珠玉
巻十 14	巻七 25	巻九 4	欵塞来享
巻十 15	巻九 48	巻九 50	憶邢惇夫
巻十 16	巻七 26	巻九 23	次韻秦少章晁適道贈答詩
巻十 17	巻五 5	巻四 18	次韻答秦少章乞酒
巻十一 1	巻九 49	巻五 14	頤軒詩六首
巻十一 2	巻九 50	巻五 11	寺斎睡起二首
巻十一 2	巻九 50	巻九 44	寺斎睡起二首
巻十一 3	巻五 6	巻三 43	記夢
巻十一 4	巻九 51	巻九 46	同元明過洪福寺戯題
巻十一 5	巻九 52	巻九 47	戯答晁深道乞消梅二首
巻十一 6	巻九 53	巻九 49	以梅饋晁深道戯贈二首
巻十一 7	巻五 7	巻四 20	次韻子実題少章寄寂斎
巻十一 8	巻五 8	巻四 17	次韻孫子実寄少游
巻十一 9	巻五 9	巻四 16	戯書秦少游壁
巻十一 10	巻五 10	巻四 19	贈秦少儀
巻十一 11	巻五 11	巻四 21	送少章従翰林蘇公余杭
巻十一 12		巻九 48	題浄因壁二首
巻十一 13		巻九 54	六月十七日昼寝
巻十一 14		巻九 55	北窓
巻十一 15		巻九 34	趙子充示竹夫人詩蓋涼寝竹器憇臂休膝似非夫人之職予為名曰青奴并以小詩取之二首
巻十一 16		巻十二 22	范蜀公挽詞二首
巻十一 17		巻十二 25	宗室公寿挽詞二首
巻十一 18	巻五 12	巻四 37	出城送客過故人東平侯趙景珍墓
巻十一 19		巻十二 26	黄潁州挽詞三首
巻十一 20		巻十二 29	楽寿県君呂氏挽詞二首
巻十一 21		巻十二 27	叔父給事挽詞十首

任淵注本	内閣文庫本	四部叢刊本	詩題（任淵注本）
巻十一 22		巻十二 12	寂住閣
巻十一 23		巻十二 13	深明閣
巻十二 1		巻五 28	竹枝詞二首
巻十二 2		巻五 29	夢李白誦竹枝詞三畳
巻十二 3	巻七 27	巻十 1	和答元明黔南贈別
巻十二 4		巻五 33	題驢瘦嶺馬舖
巻十二 5		巻五 30	行次巫山宋楙宗遣騎送折花厨醞
巻十二 6		巻十 15	次韻楙宗送別二首
巻十二 7		巻十 8	戯答劉文学
巻十二 8		巻十 6	外姪李光祖往見尚垂髫今観寄嗣直小詩已可愛因次韻
巻十二 9		巻五 34	上南陵坡
巻十二 10		巻六 1	題小猿叫駅
巻十二 11		巻十 9	馬上口号呈建始李令
巻十二 12		巻五 32	次浮塘駅見張施州小詩次其韻
巻十二 13		巻十 11	将次施州先寄張十九使君三首
巻十二 14		巻十 12	和張仲謀送別二首
巻十二 15	巻七 28	巻十 10	次韻答清江主簿趙彦成
巻十二 16		巻十 14	宋楙宗寄夔州五十詩三首
巻十二 17		巻十 13	題蘇若蘭回文錦詩図
巻十二 18	巻七 29	巻六 20	次韻楊明叔四首
巻十二 19	巻七 30	巻六 21	再次韻
巻十二 20		巻五 35	謫居黔南十首
巻十二 21	巻七 31	巻十 2	贈黔南賈使君
巻十二 22	巻七 32	巻十一 7	次韻雨糸雲鶴二首
巻十二 23		巻六 19	従斌老乞苦笋
巻十二 24	巻五 13	巻六 11	次韻黄斌老所画横竹
巻十二 25	巻五 14	巻六 12	次韻謝黄斌老送墨竹十二韻
巻十二 26	巻五 15	巻六 13	用前韻謝子舟為予作風雨竹
巻十二 27	巻五 16	巻六 14	再用前韻詠子舟所作竹
巻十二 28	巻五 17	巻六 15	戯詠子舟画両竹両鸜鵒
巻十三 1	巻五 18	巻六 16	次韻答斌老病起独游東園二首
巻十三 2	巻五 19	巻六 17	又和二首
巻十三 3	巻五 20	巻六 18	又答斌老病愈遣悶二首
巻十三 4	巻七 33	巻十 16	次韻黄斌老晩游池亭二首
巻十三 5		巻十 20	戯答史応之三首
巻十三 6	巻五 21	巻六 2	題也足軒
巻十三 7	巻五 22	巻六 23	寄題栄州祖元大師此君軒
巻十三 8		巻十 23	答李任道謝分豆粥

任淵注本	内閣文庫本	四部叢刊本	詩題（任淵注本）
巻十三 9		巻六 9	贈知命弟離戎州
巻十三 10		巻六 10	姪柜隨知命舟行
巻十三 11	巻八 1	巻十 26	次韻奉答文少激紀贈二首
巻十三 12	巻八 2	巻十 24	次韻文少激推官祈雨有感
巻十三 13	巻五 23	巻六 3	次韻李任道晩飲鎖江亭
巻十三 14	巻五 24	巻六 4	再次韻兼簡履中南玉三首
巻十三 15		巻六 5	次韻任道食荔支有感三首
巻十三 16	巻五 25	巻六 6	廖致平送緑荔支為戎州第一王公権荔支緑酒亦為戎州第一
巻十三 17		巻六 7	謝楊履道送銀茄四首
巻十三 18	巻五 26	巻六 8	送石長卿太学秋補
巻十三 19	巻八 3	巻十 25	次韻少激甘露降太守居桃葉上
巻十三 20	巻五 27	巻六 24	借景亭
巻十三 21	巻五 28	巻六 25	戯贈家安国
巻十三 22	巻八 4	巻十 17	次韻楊君全送酒
巻十三 23		巻十 18	次韻楊君全送春花
巻十三 24		巻十 19	謝楊景山送恵酒器
巻十三 25		巻十 22	史彦升送春花
巻十三 26		巻六 26	題石恪画嘗醋翁
巻十三 27		巻十 21	謝応之
巻十四 1		巻十 27	走筆謝王朴居士拄杖
巻十四 2		巻十 28	戯答王居士送文石
巻十四 3	巻五 29	巻六 22	次韻楊明叔見餞十首
巻十四 4		巻十二 14	次韻石七三六言七首
巻十四 5		巻十 3	万州太守高仲本宿約游岑公洞而夜雨連明戯作二首
巻十四 6		巻五 31	万州下巖
巻十四 6		巻十 4	万州下巖
巻十四 7		巻十 5	又戯題下巖
巻十四 8	巻八 5	巻十 7	戯題巫山県用杜子美韻
巻十四 9	巻五 30	巻七 1	和王観復洪駒父謁陳無己長句
巻十四 10	巻五 31	巻七 2	以古銅壺送王観復
巻十四 11		巻七 6	病起荊江亭即事十首
巻十四 12		巻七 13	鄒松滋寄苦竹泉橙麴蓮子湯三首
巻十四 13	巻六 1	巻七 14	次韻答黄与迪
巻十四 14	巻六 2	巻七 15	次前韻謝与迪恵所作竹五幅
巻十五 1		巻七 11	戯簡朱公武劉邦直田子平五首
巻十五 2	巻六 3	巻七 4	次韻益修四弟
巻十五 3	巻六 4	巻七 5	以峽州酒遣益修復継前韻
巻十五 4		巻十 46	謝益修四弟送石屏

任淵注本	内閣文庫本	四部叢刊本	詩題（任淵注本）
巻十五 5		巻十 39	戯答王観復酴醾菊二篇
巻十五 6		巻十一 18	戯答王子予送凌風菊二首
巻十五 7		巻十一 19	謝王子予送橄欖
巻十五 8		巻十一 20	以椰子小冠送子予
巻十五 9		巻十 43	呈楊康国
巻十五 10		巻十 44	又戯呈康国
巻十五 11	巻八 6	巻十 29	次韻馬荊州
巻十五 12	巻八 7	巻十 45	和中玉使君晩秋開天寧節道場
巻十五 13		巻十 42	入窮巷謁李材叟翹叟戯贈兼簡田子平三首
巻十五 14		巻十 30	次韻答馬中玉三首
巻十五 15		巻十 31	次韻中玉早梅二首
巻十五 16		巻十 32	次韻中玉水仙花二首
巻十五 17	巻六 5	巻七 3	王充道送水仙花五十枝欣然会心為之作詠
巻十五 18		巻十 33	呉君送水仙花并二大本
巻十五 19		巻七 9	劉邦直送早梅水仙花四首
巻十五 19		巻十 34	劉邦直送早梅水仙花四首
巻十五 20		巻十一 17	謝檀敦信送柑子
巻十五 21	巻八 8	巻十 35	贈李輔聖
巻十五 22	巻八 9	巻十 36	和高仲本喜相見
巻十五 23		巻七 12	戯詠煖足缾二首
巻十五 24		巻十 37	戯呈聞善二兄
巻十五 25	巻八 10	巻十 38	次韻聞善
巻十五 26		巻七 7	謝答聞善二兄九絶句
巻十五 27		巻七 8	戯呈聞善
巻十五 28		巻六 27	題子瞻画竹石
巻十五 29		巻九 32	戯贈米元章二首
巻十六 1	巻八 11	巻十 41	次韻答高子勉十首
巻十六 2		巻十二 15	贈高子勉四首
巻十六 3		巻十二 16	再用前韻贈子勉四首
巻十六 4		巻十二 17	荊南簽判向和卿用予六言見恵次韻奉酬四首
巻十六 5		巻十二 18	蟻蝶図
巻十六 6		巻十二 19	謝胡蔵之送栗鼠尾画維摩二首
巻十六 7		巻七 10	次韻向和卿行松滋県与鄒天錫夜語南極亭二首
巻十六 8		巻十 40	戯答荊州王充道烹茶四首
巻十六 9		巻十一 1	雨中登岳陽楼望君山二首
巻十六 10	巻八 12	巻十一 2	自巴陵略平江臨湘入通城無日不雨至黄龍奉謁清禅師継而晩晴邂逅禅客戴道純欵語作長句呈道純
巻十六 11		巻十一 8	題徐氏書院

任淵注本	内閣文庫本	四部叢刊本	詩題（任淵注本）
巻十六 12		巻十一 9	贈石敏若
巻十六 13	巻六 6	巻七 16	題胡逸老致虚庵
巻十六 14	巻六 7	巻七 17	題蓮華寺
巻十六 15	巻六 8	巻七 18	衝雨向万載道中得逍遥観遂戯題
巻十六 16		巻七 19	題竹尊者軒
巻十六 17	巻六 9	巻七 20	送密老住五峰
巻十六 18	巻八 13	巻十一 3	新喩道中寄元明用觴字韻
巻十七 1	巻六 10	巻七 21	拝劉凝之画像
巻十七 2	巻八 14	巻十一 5	湖口人李正臣蓄異石九峰東坡先生名曰壺中九華并為作詩後八年自海外帰湖口石已為好事者所取乃和前篇以為笑実建中靖国元年四月十六日明年当崇寧之元五月二十日庭堅繫舟湖口李正臣持此詩来石既不可復見東坡亦下世矣感嘆不足因次前韻
巻十七 3	巻八 15	巻十一 10	罷姑熟寄元明用觴字韻
巻十七 4	巻六 11	巻七 24	次子瞻和李太白潯陽紫極宮感秋詩韻追懐太白子瞻
巻十七 5		巻七 25	瓊芝軒
巻十七 6		巻七 26	亀殼軒
巻十七 7		巻七 27	秋声軒
巻十七 8		巻十一 4	戯效禅月作遠公詠
巻十七 9	巻六 12	巻七 22	跋子瞻和陶詩
巻十七 10	巻六 13	巻七 23	題李亮功戴嵩牛図
巻十七 11	巻八 16	巻十一 6	追和東坡題李亮功帰来図
巻十七 12	巻六 14	巻七 28	次韻徐仲車喜董元達訪之作南郭篇四韻
巻十七 13	巻六 15	巻七 29	次韻仲車為元達置酒四韻
巻十七 14	巻六 16	巻七 30	次韻仲車因婁行父見寄之詩
巻十七 15	巻六 17	巻八 1	武昌松風閣
巻十七 16	巻六 18	巻八 2	次韻文潜
巻十七 17	巻八 17	巻十一 11	和文潜舟中所題
巻十七 18		巻十一 12	題君子泉
巻十七 19		巻八 3	宿黄州観音院鍾楼上
巻十七 20		巻八 4	謝何十三送蟹
巻十七 21			又借答送蟹韻并戯小何
巻十七 22			代二螯解嘲
巻十七 23			又借前韻見意
巻十七 24		巻十一 21	次韻文潜立春日三絶句
巻十七 25		巻十一 22	再次前韻
巻十八 1	巻八 18	巻八 5	夢中和觴字韻
巻十八 2	巻六 19	巻八 6	次韻呉可権題余干県白雲亭
巻十八 3	巻八 19	巻十一 37	次韻廖明略同呉明府白雲亭宴集
巻十八 4		巻十一 35	病来十日不挙酒二首

任淵注本	内閣文庫本	四部叢刊本	詩題（任淵注本）
巻十八 5		巻十一 36	題小景扇
巻十八 6		巻十一 13	鄂州南楼書事四首
巻十八 7		巻十一 14	南楼画閣観方公悦二小詩戯次韻
巻十八 8	巻六 20	巻八 8	庭堅以去歳九月至鄂登南楼歎其制作之美成長句久欲寄遠因循至今書呈公悦
巻十八 9		巻八 9	養闘鶏
巻十八 10	巻六 21	巻八 10	顔徒貧楽斎二首
巻十八 11		巻十一 33	和涼軒二首
巻十八 12	巻六 22	巻十一 32	題黙軒和遵老
巻十八 13	巻八 20	巻十一 15	次韻文安国紀夢
巻十八 14		巻十一 16	寄賀方回
巻十八 15		巻十二 28	文安国挽詞二首
巻十八 16	巻六 23	巻八 7	鄂州節推陳栄緒恵示沿檄崇陽道中六詩老懶不能追韻輒自取韻奉和
巻十八 17	巻八 21	巻十一 23	陳栄緒恵示之字韻推奬過実非所敢当輒次高韻三首
巻十九 1	巻八 22	巻十一 24	徳孺五丈和之字詩韻難而愈工輒復和呈可発一笑
巻十九 2	巻八 23	巻十一 25	次韻徳孺新居病起
巻十九 3	巻八 24	巻十一 26	次韻徳孺感興二首
巻十九 4	巻八 25	巻十一 27	次韻徳孺恵貺秋字之句
巻十九 5		巻十一 28	求范子黙染鴉青紙二首
巻十九 6		巻十一 29	謝栄緒恵貺鮮鯽
巻十九 7		巻十一 30	謝栄緒割麞見貽二首
巻十九 8		巻十一 31	吳執中有両鵝為余烹之戯贈
巻十九 9		巻十一 39	秋冬之間鄂渚絶市無蟹今日偶得数枚吐沫相濡乃可憫笑戯成小詩三首
巻十九 10		巻十一 40	甯子与追和予岳陽楼詩復次韻二首
巻十九 11		巻十一 41	和甯子与白鹿寺
巻十九 12		巻十一 42	謝人恵猫頭笋
巻十九 13		巻十一 44	短韻奉乞蠟梅
巻十九 14	巻六 24	巻八 11	以酒渇愛江清作五小詩寄廖明略学士兼簡初和父主簿
巻十九 15		巻八 12	四休居士詩
巻十九 16	巻八 26	巻十一 45	十二月十九日夜中発鄂渚暁泊漢陽親旧携酒追送聊為短句
巻十九 17	巻八 27	巻十一 46	次韻陳栄緒同倚鍾楼晩望別後明日見寄之作
巻十九 18	巻六 25	巻八 13	過洞庭青草湖
巻十九 19		巻十一 47	過土山寨
巻十九 20	巻六 26	巻八 14	晩泊長沙示秦処度范元実用寄明略和父韻五首
巻十九 21	巻六 27	巻八 15	次韻元実病目
巻十九 22		巻八 16	勝業寺悦亭
巻十九 23		巻八 17	離福厳

任淵注本	内閣文庫本	四部叢刊本	詩題（任淵注本）
巻十九 24	巻六 28	巻八 18	花光仲仁出秦蘇詩巻思両国士不可復見開巻絶歎因花光為我作梅数枝及画煙外遠山追少游韻記巻末
巻十九 25		巻十一 48	題花光画
巻十九 26		巻十一 49	題花光画山水
巻十九 27		巻十一 50	所住堂
巻十九 28		巻十一 51	戯詠高節亭辺山礬花二首
巻二十 1	巻八 28	巻十一 52	贈恵洪
巻二十 2		巻十一 53	戯詠零陵李宗古居士家馴鷓鴣二首
巻二十 3		巻十一 54	李宗古出示謝李道人茗菷杖従蔣彦回乞葬地二頌作二詩奉呈
巻二十 4	巻六 29	巻八 19	書磨崖碑後
巻二十 5	巻六 30	巻八 20	浯溪図
巻二十 6	巻六 31	巻八 21	太平寺慈氏閣
巻二十 7	巻六 32	巻八 22	題淡山巌二首
巻二十 8	巻六 33	巻八 23	明遠庵
巻二十 9	巻六 34	巻八 24	玉芝園
巻二十 10	巻六 35	巻八 25	游愚溪
巻二十 11	巻六 36	巻八 26	代書寄翠巌新禅師
巻二十 12	巻六 37	巻八 27	戯答欧陽誠発奉議謝余送茶歌
巻二十 13		巻八 28	到桂州
巻二十 14		巻五 4	答許覚之恵桂花椰子茶盂二首
巻二十 15	巻六 38	巻八 29	以椰子茶缾寄徳孺二首
巻二十 16		巻十一 56	寄黄龍清老三首
巻二十 17	巻八 29	巻十一 55	宜陽別元明用觴字韻
巻二十 18	巻六 39	巻八 30	和范信中寓居崇寧遇雨二首
巻二十 19	巻六 40	巻八 31	乞鍾乳於曾公袞
〔なし		巻十一 34	

【付記】本稿提出後に、天理大学附属図書館にて『豫章黄先生文集』三十巻『外集』十四巻（存文集巻二至巻十四、巻十七至巻十九、外集巻一至巻六）を閲覧する機会を得た。『四部叢刊』所収本と同一系統だが、作品の配列に若干の違いがあり、巻二の冒頭は「古風二首上蘇子瞻」であった。また『四部叢刊』所収本には割注で「一作……」と校記が見えるが、これが天理大学附属図書館本と一致する。このことから、天理大学附属図書館所蔵本のほうが、『四部叢刊』所収本より古い形を残していると思われる。今回は時間の都合で、全体の作品配列と、任淵注本の巻一についての対校のみ行ったが、いずれもっと詳しく調査して報告したい。